

論文題目：森田思軒の翻訳観：共存する二つの志向

英文題目：Morita Shiken's Views on Translation: Two Coexisting Orientations

提出機関：立教大学

提出者：齊藤美野

指導教授：鳥飼玖美子教授

提出年月：2011 年 1 月

取得学位：博士（異文化コミュニケーション学）

英文要旨

This study focuses on a translator and journalist Morita Shiken (1861-1897) who worked as a literary translator from English to Japanese mainly in the third decade of the Meiji era Japan (1868-1912). His views on translation, or his ideas about and his attitude towards translation, are explored through analyses of his statements about translation in his writings such as his magazine articles, introductions or notes to his translation works, and of his translation text of "Hubert, The Spy" (1889) by V. Hugo. His statements and translation text are examined in relation to a social context of that time. Polysystem theory propounded by Itamar Even-Zohar (1978/2004, 1990a, 1990b) enables us to see a relationship between literary translations and the social context. Based on the notion of polysystem, this study demonstrates that Morita's views on translation, his translation text and the social context were interrelated within the polysystem of that time.

和文要旨

本論は、日本の明治期の文学翻訳者・新聞記者である森田思軒(1861-1897)の翻訳観(翻訳に対する考え・態度)を、思軒の残した言説(エッセイや、翻訳作品に付された序文や註など)と、思軒の訳した作品「探偵ユーベル」(1889, 原著ユゴー)を分析し探るものである。加えて、思軒の翻訳観と思軒の活躍した明治20年代の社会的コンテクストとの相関を、イーヴン＝ゾウハー(I. Even-Zohar)の「多元システム理論(polysystem theory)」(Itamar Even-Zohar, 1978/2004; 1990a; 1990b)の観点から考察した。そうして、思軒の言説と翻訳実践、及び社会的コンテクストとの相関を描写し、思軒の翻訳観に見られる起点テキスト志向と目標テキスト志向という二つの志向と、文学翻訳のもつ異質性について論じ、また明治20年代の文学的多元システムにおける翻訳文学システムの位置に関する可能性について論じた。森田思軒は英日翻訳者として、また記者として活躍し、明治文壇において「翻訳王」と呼ばれ重要視された

SAITO, Mino. "Morita Shiken's Views on Translation: Two Coexisting Orientations," *Interpreting and Translation Studies*, No.11, 2011. pages 215-219. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

人物であったが、死後は注目されることが少なくなっており、研究対象となることも少ない。しかし、思軒は翻訳や文章一般について多くの言説を残しており、そこから時代を反映した翻訳観を探ることが可能である。本論は、この翻訳者の言説をもとに、翻訳観、そして当時の文学翻訳について全 8 章をもって考究した。

多元システム理論

考察に用いた多元システム理論は、文学作品を複数の「文学システム」によって構成される「文学的多元システム」の一部とし、翻訳文学も文学的多元システム内の一つのシステムとして捉えるため、翻訳文学について、ほかのシステムとの関係を含めて論じることができる。システムは階層化されており、文学的多元システムの中心に位置するものと周辺に位置するものがある。システムは固定的ではなく常に「流動」、「競合」するものであって、各システムは「対立関係」にあると表現される(また、一つのシステム内にも複数の層があり、対立関係にある)。つまり、文学的多元システムの中で優位を占めるシステムは変動していき、翻訳文学が優位を占める場合もある。そのような場合の一つとして挙げられるのは、あるシステム内で、既存の文学モデル等が不十分と見なされ許容されなくなり、その代わりとして新しいモデルが移入可能となるとき、即ち転換期である(Even-Zohar, 1978/2004)。本論が研究対象とする明治時代もこの転換期にあったことが、言語や文学の変化と考え合わせると、推測できる。

日本の明治時代は、西欧列強に対抗できるよう、また日清戦争に代表されるように海外へ領土の拡大を狙い、近代化が押し進められた時代である。近代国家としての日本を成立させ強化するために、「国語」が創り出されたのもこの頃であった。言文一致化が図られ、言語、文体、文学に大きな変化をもたらされたのである。この歴史的転換期は、西洋の作品が多数訳された「翻訳主義」(丸山・加藤, 1998, p. 43)の時代でもある。西欧列強を中心とする諸外国の文学作品も次々に訳出され、また訳される作品数が増すにつれて、主流となる訳出法が変化を遂げていった。森田思軒が活躍する頃になると、起点テキストの内容だけではなく形式にも注意を払い、目標テキストにおいて再現しようとする翻訳者が出てくる。このような訳出法の変化についても多元システムの観点から考察可能である。翻訳文学の地位は、翻訳実践に影響を及ぼすとされ、次のような傾向が考えられる。翻訳文学システムが従属的な位置にあるときは、翻訳者は訳出にあたり目標文化・言語(訳出先の文化・言語)の既存のモデルを使用する傾向にあり、他方、翻訳文学が優位を占める場合には翻訳者は既存のモデルに合わせるのではなく、慣例に反する訳出法をとりやすい環境にあると言える。別言すれば、翻訳文学が優位にあると、起点テキストを重視した訳出法を選ぶことが容易になるのである。本論の考察の中で多元システム理論の弱点も明らかになるが、思軒の翻訳観における二つの志向の共存や、文学翻訳と社会的コンテキストの繋がりを考える上で、この理論は有効な観点を与えてくれる。

社会的コンテキストと翻訳観

上述のように、多元システム概念に基づいて翻訳作品や翻訳者について考察する場合、作品や翻訳者が存在していた社会的コンテキストの中で対象を捉えることが必要となる。そこ

で本論は、思軒の翻訳観を次のような手順をもって考察した。まず、明治 20 年代を中心とした言語、文学、翻訳文学に関する社会的コンテクストを把握した。明治期のナショナリズムの高揚と「国語」の創出について論じることから、この頃の日本が言語、文学面においても転換期にあったこと、つまり翻訳文学システムが優位を占める可能性を孕んだ時期であったことが示される(第 3 章)。言語や文学が変化していった様子は思軒の言説にも表されており、その相関にも触れながらコンテクストについて論じた。また、この時期の文学翻訳の訳出方法が翻訳者の意識と共に変化していった様子を記し、翻訳の文体について、訓読の伝統という側面からの考察も行った(第 4 章)。

次に本論の考察の主眼である森田思軒の人物像を把握するべく、経歴や同時代人を中心とする思軒の評価を見る(第 5 章)。森田思軒という人物が、新聞記者、並びに文学翻訳者としてどのように活躍していたのか、また思軒の仕事、作品はどのように受容されていたのかについて考え、そこから思軒の訳文体であり、漢文の要素と英語からの逐語訳の要素を併せもつ「周密体」について、思軒がこの文体を用いた意図や背景を含め論じた。思軒が新聞記者として活動していた点にも、訳出法の選択と関わりをもつと考えられる点ため言及した。

二つの志向

森田思軒のエッセイや講演録などの言説を分析すると、起点テキストを重視するものと、目標テキストを重視するものと、二つの志向が確認され、それぞれが複数の考えから成り立つことがわかる。このような二つの志向は、思軒以外の翻訳者、研究者によっても古くは紀元前から論ぜられてきた。その中でこの対概念は排他的な二項対立として捉えられることも多くあったが(第 2 章)、思軒の翻訳観には両志向が、時に対立し融合しながら、共存しているようである。思軒の考えを細かに見ていくと、先行研究(第 2 章)に取り上げた異質性に関する論との共通点も見つかり、思軒が異質性を移入する翻訳を試みていたことが示された。翻訳を通し起点テキストの異質な表現方法を読者に伝えよう、あるいは目標言語を発展させよう、文学に変化をもたらそうという狙いを翻訳者がもつと、目標テキストに翻訳を通して異質性が持ち込まれる。起点テキスト志向は、この原文から異質なものを移入しようという態度と結びつき、目標テキスト志向は、異質性を抑え読者に受容されやすいテキストを生みだそうという姿勢と繋がる。

思軒の起点テキスト・目標テキスト両志向が、実際の翻訳行為においてどのように機能していたのか探るため、翻訳作品を分析した(第 7 章)。思軒訳「探偵ユーベル」の起点テキスト(思軒が底本にした英語のテキスト)と目標テキスト(日本語)の対照分析を行い、両志向が訳出事例に表れているかどうか検証した。思軒がとった訳出法には、起点テキスト志向が表れた方法と、目標テキスト志向が表れたものとの両方が、やはり共存していることが示された。さらに、起点テキストを尊重しながら、目標テキストの受容性も高めようとする方法が用いられた訳出事例から、二つの志向は対立するだけではなく、ときに融合していたことも考えられた。

考察

以上を踏まえ、次の3点の事項、1) 言語と文学を中心とした当時の社会的コンテキスト(翻訳文学の変化や、思軒の経歴を含む)、2) 思軒の言説、及び 3) 翻訳テキスト(「探偵ユーベル」)の相関性を描きながら、次の三つの項目について考察した。a) 思軒の翻訳観に見られた二つの志向(加えて翻訳文学システム内の両志向)の共存、b) 異質性という文学翻訳の性質、c) 明治20年代の文学的多元システムにおける翻訳文学の位置の3項目である。

明治という時代における社会変動と相俟って、翻訳作品は革新を起こそうとし、日本の発展のため西洋の作品から学ぼうという、翻訳者を含む近代主義の思想を身につけた人々、つまりエリートを中心とした「読者」たちが求める情報を提供した。そのとき思軒が起点テキストと目標テキスト両者を重要視して、よりよい翻訳を生み出すために翻訳に関し多様な意見を発し、複数の訳出法を試していたことは、当時の社会的コンテキストの状況を考えると、自然なことであったと思われる。国家の言語としての「日本語」の創出や、それに関わって言文一致体の登場、また近代「文学」の発生といった事象の背景にあった言語・文章に関する思想は、思軒の翻訳に対する意見と重なる部分が多い。日本の言語を古い伝統から解放し、新しい時代に合わせて進化させようという考えが、両者に通じているのである。両者の関連から、多元システム理論の説明にあるように、翻訳文学が社会のほかの事象から切り離され孤立して存在していたのではなく、翻訳文学システムはほかのシステム(社会的コンテキスト)と常に相関していたことがはっきりと示された。思軒にとって文学翻訳は、目標言語・文化に異質な要素を持ち込むものであり、同時に読者に受容されなければならないものでもあった。転換期にあった当時の状況と照らし合わせれば当然のことに、思軒の翻訳観に見られた二つの志向は、思軒の実践において融合していた。この実践は、そして思軒が二つの志向に繋がる言説を多く残していたことは、システムの中で生きる翻訳者であったことを明白にすると同時に、起点テキスト志向と目標テキスト志向という対概念が、必ずしも排他的な概念ではないということを示した。当時の文学的多元システムにおける翻訳文学システムの中で両志向が二つの層として競合していたことや、翻訳文学システムと創作文学システムとの対立が、思軒の二つの志向から考えられた。

また思軒の翻訳観に起点テキスト志向が強かったこと、即ち思軒が目標言語・文化の慣例に反する訳出法を推奨し、異質性を移入する訳出法をとることができたことも、当時の翻訳文学システムと関連があると思われた。歴史的な転換期を迎えていた明治期には、文学的多元システム内の翻訳文学システムの地位が中心的で優位にあった可能性があり、そのことが、日本の言語や創作文学の慣例を壊すような訳出方略をとりやすくしていたことが考えられたのである。

思軒は、当時のコンテキストにおいて特別に変わった考えをもっていたのではなく、同時代のエリートとイデオロギーを共有し(思軒もエリートであった)、政治家や学者、文筆家、翻訳者といった人々が近代化という目標に向かって考え行動していたその動きと同調し、国家主義的・近代的言語改良主義の翻訳観を保持していた。そして、そのような思想を共有する人々が望むものを作品として提供した。思軒の翻訳観はこの時期の多元システム内において形成され

たのであり、またその中で翻訳実践が行われたのである。本論を通して文学作品の翻訳について考えたことによって、文学翻訳と時代が、大いに関わりをもつことが明確となった。明治20年代について言えば、近代化に際し、文学翻訳(及びその他の翻訳作品)が重要な役割をもったということだけでなく、その時代の中で翻訳が行われていたということが大切な点である。明治20年代の文学的多元システムを描き出すことは、当時の多元システムにおいて、文学翻訳が果たした役割、あるいは文学翻訳システムが他システムへ与えた影響を明らかにすることだけではなく、文学翻訳システム自体が社会や創作文学など他のシステムから受けた影響をも明らかにすることであった。当時の文学翻訳は、単に西洋の文物の移入手段だったのではなく、翻訳者はそこから西洋の概念・思想・情報を取り込み、その上で新たに翻訳実践を行ったのである。

今後の課題と展望

本研究が行ったのは、森田思軒という一名の翻訳者に特化した分析である。思軒の言説と訳出物の分析から、さらにコンテキスト(言語・文学の状況)の検証から、翻訳文学が当時の多元システムの中で優位にあったことが推測されたが、これはあくまで推量にとどまる。本論が示すことができた「可能性」の実証については今後の課題とし、同時代のほかの翻訳作品や創作文学、また社会的コンテキストのうち本論が触れなかった部分も併せて考察することによって、多元システムをさらに具体的に示せるようになるだろう。

【著者紹介】

齊藤美野(SAITO Mino) 東海大学・麗澤大学講師。立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士後期課程修了。博士(異文化コミュニケーション学)。文学作品を中心に、文化・社会・思想面から翻訳研究に取り組む。

【参考文献】(本稿への引用文献のみ)

- Even-Zohar, I. (1978/2004). The position of translated literature within the literary polysystem. In L. Venuti (Ed.), *The translation studies reader* (2nd ed.) (pp. 199-204). London: Routledge.
- Even-Zohar, I. (1990a). Polysystem theory. *Poetics Today*, 11 (1) (Spring), 9-26.
- Even-Zohar, I. (1990b). The “literary system”. *Poetics Today*, 11 (1) (Spring), 27-44.
- ユゴー, V. (1889) 『探偵ユーベル』(森田思軒・訳) 民友社
- 丸山真男・加藤周一 (1998) 『翻訳と日本の近代』 岩波書店

